

癒しと病 牧会の課題として -1-

Healing and Disease as Pastoral Subject -1-

山城 順
Jun Yamashiro

はじめに 課題と方法

1. 第1章 癒しと病 旧約聖書における

1. 病気の種類 2. 薬剤 3. 医者と衛生 4. まとめ

はじめに 課題と方法

「癒し」をこのような論稿の課題としてとりあげることができるだろうか（補注）。もとより説明できるようなことはすべて説明し尽くされているだろうし、聖書にある「治癒」の多くは説明できない「奇跡」として記されている。説明することは、治癒奇跡の範疇を侵害することになりかねないと言える。癒しは本来癒されることに目的があって、説明を必要とはしない。それは神を説明したり、神について論じる愚かさにも似ている。そうであるがゆえに、癒しを本稿の課題として取り上げることに一抹の躊躇を禁じえない。にもかかわらず、あえて取り上げようとするのは、「癒し」は多くの人々が求めている現代の課題であるからである。また少しでも癒しの瞬間を経験したものは、それが何であったのか、分かろうとする欲求が生まれる。いま癒しの「瞬間」と言ったが、私はこの瞬間を、31年の牧会のなかで、なんとか経験した。その経験を牧師が語ることは当事者との関係でしないのであるが、牧会の働きを離れた今、私は客観的な立場から反省することをゆるされているように思う。

ある婦人が乳がんの手術をすることになったといい、検査の経過と、入院の日取りを告げ、祈ってくださいと願った。私は、手術にしっかりと立ち向かえるようにという趣旨のことを祈った。数日後、彼女は入院し、手術のための診察を受けたのであるが、乳がんが消えて、治療をする必要はなくなっていた。その喜びを語った。

このような話を、牧師は他人に口外しない。本人が言わなければ、広く知られることはない。しかし、まれであっても、このような癒しは起っていると認識される。ところで、死をまぬがれるような奇跡を経験しても、人は、いつかは死ぬ存在であり、癒しが、人に永遠を保証するものではない。まして、癒しを生計の糧にしたり、人を驚かせて入信の手段とするというようなことはあってはならない。

「癒し」は、絶対なるものとの接触を含み、絶対なるものへの希求と結びついている。西田哲学を通して「絶対矛盾的自己同一」という言葉に触れた滝沢克巳は、このキーワードから神と人との絶対矛盾的自己同一性、すなわち、神が人と共にいます「インマヌエル」の真相を明らかにしようとした。（注1）「癒し」とはなんであるか。あえて定義しようとするれば、絶対なるものと

の接触といえよう。または、絶対矛盾的自己同一性への希求といおう。あるいは、絶対矛盾的自己同一の和らぎである。この一点こそ、ささやかな牧会の経験が解明を求める課題である。

本論文は、3章から構成される。本稿では、まず課題と方法を明らかにする。第1章は、「癒しと病」を旧約聖書に概観する。旧約聖書の特徴は、神に対する人の関係、すなわち信仰を軸にして、病をとらえるところにある。神に逆らう者には審きと呪いが下され、人は病む。悔い改めて、神を信じると癒される。病は神との関係から生ずる。(注2) また人とのゆがんだ関係があらわれる。現代医学から見ると、こういう図式が単純だと思われるのは、やむを得ない。しかし、癒しの軸となる神に対する信仰と同時に、神の「憐れみ」として言い表されている事柄が、最近強調されるようになった。神の「共感」であり、その力がもたらすところの癒しである。この問題については次稿でとりあげよう。第2章は、「癒しと病」を新約聖書に概観する。イエスは、「神の審きとしての病」という軸を取り払った。病気を罪と結びつけ、罪に対する神の審きとする観念は旧約聖書の特徴である。それは仏教に広まった因果応報思想にも見られるが、仏教やユダヤ教に特有ということではなく一般に流布している。

イエスは、病を、神のみわざが現れる「癒し」の契機としてとらえた。(注3) そして癒しの実現のために、信仰を求めた。(注4) これによりイエスは、病を審きの結果として見る旧約を乗り越えている。そのかわりに、病む心を共感する「憐れみ」すなわち「共感力」が前面にでてくる。共感は全人格的な活動であり、癒しの力を発揮する。(注5)

3章は、心身の成立について考える。心とからだが分離する前に戻る。癒しは心身の調和をもたらす。神と人、人と人との絶対矛盾的自己同一の和らぎなくして起こり得ない。最後に、共存の原理について考察する。そこで、アダムからイブが作られたとする話は脳神経学また遺伝子学の批判にどう耐えるだろうか。生理学的には聖書の記述に間違いがあると認めてもいいのではないかという見解を述べる。そして、フェミニズム神学の成果について批判的検討を加える。共存の原理として神の「憐れみ」を考察しようと思う。

第1章 癒しと病 旧約聖書における

1. 病気の種類

1-1 旧約聖書に多くの病がでてくる。創世記の第一部、神話は病の深層を語っている。アダムとイブは、食べてはならないと禁じられていた木の実を食べた。戒めを破って食べるような自分を自覚する、というところに、人類の罪意識の芽生えが語られている。罪の意識は、見えないはずの神が歩く足音さえ聞こえるほど対他性を持ち、彼らは木の間に自分を隠そうとする。裸であってもどうもなかったのに、裸を意識し、恥じる。また、自分が無防備であることを知る。身を守るために、あるいは身を隠すために、木の葉をまとう。病の深層を語っている。

彼らの間に双子のカインとアベルが生まれた。カインはささいなことでアベルを殺し、共に生きる相手を失う。カインが地の産物を神にささげたとき、神はこれを好まず、アベルがささげた野の獣のいけにえを神は好んだ。神が一方をよしとし、一方を好まなかった理由は明らかでない

が、カインはその理由を神に問わず、不満を弟に転嫁する。弟を妬み、殺してしまう。悲劇の始まりが語られている。人と自分を比べて「妬む」のは心の病である。あるいはモーセの十戒の第十戒は「むさぼるなかれ」と無意識の罪を指摘している。心の病を無意識層から明かしている。心の病の深層がこのようなであれば、病の癒しはおのずと神の戒めを守ることにあると暗示される。

1-2 族長たちの病気

創世記第二部はアブラハム、イサク、ヤコブ、ヨセフと続く族長たちの物語である。

次は、アブラハムの老年の話である。

「日が沈みかけたころ、アブラハムは深い眠りに襲われた。すると恐ろしい暗黒が彼に臨んだ」
(創世記15:12)

人は年をとると早く目がさめ、しばしば眠くなる。アブラハムも老化にともなう病をもっていた。脳の血管の老化や収縮による眠りもある。医学的な立場から見ると次のように説明される。夕方に深い眠りに襲われるのは正常でなく、眠りをつかさどる中脳、間脳皮質系統が突然かき乱されたことによる。脳皮質や細胞は新陳代謝活動によって影響を受けやすい。組織内酸素欠乏、低血糖症も考えられる。また、自家中毒症によってもおこるので、食あたりも考慮される。上記のように、眠りを、生理的に酸素欠乏による脳障害と説明できるだろう。しかし、文脈からするとそれだけではない。アブラハムはこの眠りの中で、神が語る将来の苦難と繁栄の約束を聞いた。彼は神と契約を結ぶ。アブラハムと結ばれた契約はその子孫たちに及ぶ契約でもあった。アブラハムは異界にいます神と、夢の中でこそ、契約を結ぶことができる。夢は精神分析のテーマとなる。夢はアブラハムの意識の底にある願望の表われと言える。この世での生を終えて、永遠の世界というものがあるとするならば、その異界と取り結ぶところの何かを手にしたい。すなわち契約を結んでおきたい。眠りを老化現象と見るだけでなく、眠りに表われるこのような潜在意識を理解することが大事である。また、眠りに現れる祈願とその実現のストーリーを無視する事はない。

暗黒は、「心の闇」というように心理学的にも解釈できる。アブラハムは子どもがいなかった。子どもがいなければ、だれが財産や精神を受け継ぐだろうか。それは老年になったアブラハムの悩みであった。これに対して、神が約束されたことは、子どもが与えられ、子孫が繁栄していくことであった。神の祝福の、想像できない大きさと、老年のアブラハムの虚無感が対照的である。アブラハムの病は神の約束を信じて希望をもつことによって癒される。

1-3 長寿

族長たちは長寿であった。アブラハムは175歳、イサクは白内障を病んだが180歳を生きた。イサクは「高齢のうちに満ち足りて死に、先祖の列に加えられた」。ヤコブは147歳、ヨセフは110歳まで生きた。そして、モーセは死んだとき120歳であったが、目はかすまず、活力もうせてはいなかった。(申命記34:7)

健康であってこそ長寿である。長寿は神の祝福のしるしとされた。

1-4 目 イサクの白内障

「イサクは年をとり、目がかすんで見えなくなってきた」。(創世記27:1)

イサクは年をとり白内障になった。その子ヤコブも白内障になった。

サムソンはペリシテ人に捕らえられると目をえぐられて盲目にされた。報復されたのである。バビロンに反逆し国を滅亡に導いたゼデキヤ王はバビロンに捕囚として引かれ、両目を奪われ、足かせにつながれた。サムソンとヒゼキは、神に反逆した罪に対する懲罰として、盲目にされた。この場合病は神への不信または反逆に対する懲罰であった。

1-5 関節脱臼 ヤコブの組み打ち

「ヤコブは独り後に残った。そのとき、何者かが夜明けまでヤコブと格闘した。ところが、その人はヤコブに勝てないとみて、ヤコブの腿の関節を打ったので、格闘をしているうちに腿の関節がはずれた」。(創世記32:25,26)

ヤコブは20年の外地逗留の後、帰郷した。国境の川を渡るとき、不安の夜を眠れなかった。そこで夢を見た。何者かが夜明けまで組みついて勝負がつかなかった。明け方になってもヤコブが放さないで、その人は急所にあたる腿の関節を打って、ヤコブの関節を外した。こうして組み打ちは終わり、その者は立ち去った。

股関節脱臼または大腿骨の亜脱臼といえる。力を入れすぎたときに起こる椎間板ヘルニア、また頑強な坐骨神経痛も考えられる。からだに障害をもつ人は、ヤコブがその後障害者として生きたことに親近感を覚えてきた。神学者は、ヤコブの高慢が砕かれたことを象徴的に語っていると解釈してきた。心理学的には、兄エサウとの葛藤が夢の背景にあると分析できる。

人間だれしもどこかに弱点をもっていると説くアキレウスの神話から、足くびを「アキレス腱」と名づけたように、ヤコブの物語も多くの人が股関節に障害をもって悩んだことを反映している。しかし、この物語の真意はヤコブが神と格闘するところにある。それは真の意味での祈りである。兄に対する懺悔と赦しの思いが、格闘する心の葛藤としてあらわれている。赦しの保証を求めて神の使いをはなさない。そのような神に対する熱心が話の中心となる。エサウは兄と和解し共存することになった。

1-6 ヤコブの失神

「ヨセフがまだ生きています。しかも、エジプト全国を治める者になっています」。父は気が遠くなった。彼らの言うことが信じられなかったのである。(創世記 45:26)

最愛の子ヨセフを失ったとき、父ヤコブは幾日も嘆き、悲しみ、息子娘たちの慰めを拒んで言った。「ああ、わたしもあの子のところへ、嘆きながら陰府へ下って行こう」。それから27年を経て、亡くしたと思っていたわが子に再会した父ヤコブは驚きのあまり、失神してしまった。ショック

また感情的因子からの失神、立っていて失神した場合、横にすると数秒ないし数分で意識を回復する。愛する子どもとの離別や喪失が与える打撃は死に等しい。反対に、子どもとの再会は喜びである。関係の回復が人に与えるものは、命の生き返りである。神との関係喪失は罪であり、その結実死である。逆に、赦しは関係を回復する。新しい命の復活といえる。ヤコブはこの後16年生きて、死んだ。世にある限り死は必然であるが、彼は世にあって彼が行くべき所、即ち永遠を反映している。

ところで、病気の多くは、神の意志に背いたことからくる心理的葛藤であったり、呪と結びついて考えられた。病が、神の祝福または呪いと結びつけられるのは旧約聖書のみならず医学以前の世界の特徴である。

1-7 疫病 重い皮膚病とハンセン病（らい病）

出エジプト物語に疫病の災いが多数でてくる。神の意志に従わないエジプト王ファラオとその民に下された審きであった。イスラエルの民60万人を、エジプトでの400年に及ぶ奴隷状況から解放する物語「出エジプト記」の中に多くの病気がでてくる。「モーセが神の力のしるしを求めたところ、神は『あなたの手をふところに入れなさい』といわれた。モーセは手をふところに入れ、それから出してみると、驚いたことには、手は重い皮膚病にかかり、雪のように白くなっていた。主が『手をふところに戻すがよい』といわれたので、ふところに戻し、それから出してみると、元の肌になっていた」。(4:6,7)。1985年発行の口語訳聖書では、旧約聖書に49箇所（注6）、新約聖書に13箇所（注7）で「らい病」と訳されている。「らい」は、ハンセンによって病原菌が発見され、それからプロミンという薬が開発されて、ほとんど治療できる病気となった。にもかかわらず、日本では1998年の国会で廃案が決定されるまで、患者を強制隔離して社会から抹殺する「らい予防法」により、患者には大変な犠牲を強いてきた。らいの歴史は日本では人権侵害の歴史である。これらの事情から、「らい」という言葉を使わないで、病原菌を発見したハンセンの名をとって「ハンセン病」と呼ぶようになった。ハンセンが発見したらい菌による厳密な意味でのハンセン病は皮膚病の中で限られた病気であり、疥癬や白癬などと区別しなければならない。新共同訳聖書はこの誤りを訂正し、「重い皮膚病」と訳すようになった。「らい病」は、日本でも天刑病ともよばれ、神の刑罰を受けた病気とされてきた。病気が死に至る重い病気であって、人の治療行為によって治らない時、人間を超えた神と結びつけられて天刑病となったのであろう。

申命記によると、イスラエルが神の御声に聞き従わず、神の戒めと掟を守らなかった罰として「呪いと混乱と懲らしめを送り、滅ぼす」(28:15～35)とある。以下次のような病が神の呪いとして記されている。疫病、肺病、熱病、高熱病、悪性熱病、はれ物、潰瘍、できもの、皮癬などがある。気を狂わせ、盲目にし、精神を錯乱させる。このように、旧約は、多くの場合、病を罪と結びつけ、神に逆らう罪の結果としている。したがって、癒しは、罪の告白に結びつき、神との交わりの回復を内容とする。

1-8 身体に障害をもつ人

身体に障害をもつ人は、神に仕える祭司職から除外された。レビ記21章に列挙されている障害は次の通りである。「目や足の不自由な者、鼻に欠陥のある者、手足の不釣り合いの者、手足の折れた者、背中にこぶのある者、目が弱く欠陥のある者、できものや疥癬のある者、睾丸のつぶれた者」。このような障害者は祭壇に近づいたり、聖所を汚してはならないとされた。カトリック教会は、神父や司祭になる者から、障害者を除外している。プロテスタント教会は、そう考えない。女性の牧師がいる。身体に障害のある牧師、盲人牧師、ハンセン病の牧師など、障害をもちながらキリストに出会い、救われた福音を携えて働いている。女性の問題は女性牧師がより分かるだろう。障害をもつ悩みは同じ障害をもって悩み苦しんでいる人の方が理解できるだろう。被差別部落に生まれて牧師になった人がある。レビ記の規定は、伝染を防ぐ予防の意味を持っているとはいえ、今から見ると、障害者に対する偏見・差別があることを否めない。イエスによってなされた克服を待つほかない。更に聖書の順を追って、癒しと病について考察しよう。

1-9 耳の聞こえぬ者、目の見えぬ者

「耳の聞こえぬ者を悪く言ったり、目の見えぬ者の前に障害物を置いてはならない。あなたの神を畏れなさい。わたしは主である。」(レビ記19:14)

身体障害者への配慮を命じた掟である。眼病、中耳炎が多かったと思われる。その結果、聞こえなくなったり、見えなくなったのである。病人に対する倫理を、神を恐れ敬う精神から説き起こしている。

書きなおされた言葉

聖書では、以前は「めくら」、「つんぼ」と訳していた。「瞽者＝目しい、聾者＝耳しい」ともいった。障害者の人権については、1971年に「精神薄弱者の権利宣言」が、1975年には「障害者の権利宣言」が国連で決議され、人権意識の広まりは世界的なものとなった。聖書においても1984年から以下の10の不快用語＝差別用語が見直された。「めくら」→「目が見えない人」、「おし」→「口がきけない人」、「不具・かたわ」→「片足」(マルコ9:43)「気違い」→「気が変になる」、「こびと」→「背のごく低いもの」、「せむし」→「背中の曲がった者」、「つんぼ」→「聞くことのできない者」、「びっこ」→「あるくのが不自由な者」、「貧乏人」→「貧しい人」、「不具者」→「体の不自由な人」。その後、「らい」はすべて「重い皮膚病」となおされた。

1-10 エジプトのはれ物、皮癬

「主は、エジプトのはれ物、潰瘍、できもの、皮癬などであなたを打たれ、あなたはいやされることはない。……主は悪いはれ物を両膝や腿に生じさせ、あなたはいやされることはない。それはあなたの足の裏から頭のとっぺんまで増え広がる。」(申命記28:27,35)

発熱とともに発疹が化膿してくる。天然痘と思われる。重いと死ぬ、恐ろしい病気であるが今は種痘のために殆ど克服されている。「皮癬」はくもに似た人類ヒゼンダニが寄生して生じる。

指間、腕関節、四肢屈側、乳房下、下腹部に、粟粒大の大丘疹を生じる。

1-11 腫れ物とねずみ

「神の箱が移されて来ると、主の御手がその町に甚だしい恐慌を引き起こした。町の住民は、小さい者から大きい者までも打たれ、はれ物が彼らの間に広がった。…はれ物の模型と大地を荒らすねずみの模型を造って、イスラエルの神に栄光を帰すならば、恐らくイスラエルの神は、あなたたち、あなたたちの神々、そしてあなたたちの土地の上にのしかかっているその手を軽くされるだろう。」(サムエル記上 5:9,6:5)

伝染性の腺腫で、すね、脇、頸部に腫れ物が生じた。モーセの十戒を納めた神の箱は、神がその民と共に居る臨在のしるしであり、神の箱が奪われると、イスラエルは弱り、伝染病が広がって、多くの人々が死亡した。死体のそばには多数の動物の死骸があった。それで金の腫れ物と金のねずみを作って、災難を乗り移らせて別のところに去らせて、逃れようとしたのである。

1-12 サウルの心の病

主の霊はサウルから離れ、主から来る悪霊が彼をさいなむようになった。サウルの家臣はサウルに勧めた。「あなたをさいなむのは神からの悪霊でしょう。」(サムエル記上16:14,15)

政権の座についたサウル王は、周辺の敵と戦わねばならなかった。激戦が続いた。アマレク人と戦ったとき、預言者サムエルは神の言葉を告げて、アマレク人を子どもも家畜も一切、滅ぼし尽くせと、サウル王に命じた。しかし、サウルは、自分たちに親切にしてくれたカイン人を避難させ、アマレクの王を生け捕りにして、家畜のつまらないものを殺したが、多くは残した。私たちには、サウル王のしたことは良識的と見えるが、預言者サムエルはこれを神への反逆と指摘する。サウルはその非をわびて、神へのとりなしを懇願し、神を礼拝した。しかし、この一件は神への反逆とされた。神が彼を離れたので、サウルは精神の安定を失い、障害をもつようになった。サウル王は、感情の乱れ、粗暴、躁が次第に強くあらわれてくる。また、サウルの家臣となり、後に王位を継いだダビデと、はじめはよい関係にあったが、ダビデが戦場で功績を上げて人気を博し、「サウルは千を討ち、ダビデは万を討った」というはやり歌を聞くようになるとサウルはますますダビデを妬んだ。またダビデが自分を殺そうとしているという被害妄想をもち、ダビデを殺そうとした。神に従う関係ならば、祝福され、病は癒される。しかし、サウルは赦されえない過ちを犯したことになる。

1-13 ダビデの仮病

「そこで彼は、人々の前で変わったふるまいをした。彼らに捕らえられると、気が狂ったのだと見せかけひげによだれを垂らしたり、城門の扉をかきむしったりした。アキシユは家臣に言った。「見てみろ、この男は気が狂っている。なぜ連れて来たのだ」。(サムエル記上21:14-15)

サウル王に命をねらわれて逃れてきた町で、ダビデは捕らえられそうになる。そこで仮病を装っ

て窮地を脱した。気が「狂う」は不快語とされ、注意が必要であるが、精神障害者を人として取り扱わない差別をダビデは逆手にとっている。ダビデは仮病を装って、嫌いにさせ、排斥させて、難を逃れた。精神障害者を嫌悪し差別する社会的観念を背景に見ることができる。

1-14 奇形

「別の戦いがガトでもあった。ラファの子孫で、手足の指が六本ずつ、合わせて二十四本ある巨人が出てきた」。(サムエル記下21:20)

巨人は成長ホルモンの過多によりおこる。先天性で原因不明なものもある。子宮内生活の異常、母体の疾病、栄養不良、外傷によることもある。六本の指は多指症。ノアの物語にネフィリムという巨人がでてくる。(注7) その子孫が、出エジプトの民がいよいよ約束の地カナンに入ろうとする時の偵察隊の報告に出てくる。「われわれが見たのは、ネフィリムなのだ。…われわれは自分がいながらのように小さく見えたし、彼らの目にもそう見えたにちがいない。」(民数記13:33)。物語では巨人の大きさは人間の尊大をあらわしている。また、ダビデが戦ったペリシテ人ゴリアテは身の丈六アンマ半とある。1アンマは45センチとして、ほとんど3メートルもの巨人である。ダビデは投石器の石一つで、ゴリアテの額を打ち砕いて、勝利した。神が共に居たからである。(サムエル記上17:4)

1-15 頭痛

「その子は大きくなったが、ある日刈り入れをする人々と共にいた父のところに行ったとき、『頭が、頭が』と言った。父が従者に、『この子を母親のところに抱いて行ってくれ』と言ったので、従者はその子を母親のところに抱いて行った。その子は母の膝の上でじっとしていたが、昼ごろ死んでしまった」。(列王記下4:18-20)

発病後5時間ほどでこの子は死んでいる。日射病であれば昏睡にいたるまで高熱、嘔吐、下痢、痙攣があるが、母のひざの上で静かにしていて、亡くなった。くも膜下出血と考えられる。それは脳の血管に粟粒ほどの動脈瘤ができ、これが破れて出血する。

1-16 18万5千人の死体

「その夜、主の御使いが現れ、アッシリアの陣営で18万5千人を撃った。朝早く起きてみると、彼らは皆死体となっていた。」(列王記下19:3)

主の使いが夜の内に刀で殺したのか、そうでなければ、疫病が考えられる。野ねずみが大量に繁殖してペストに感染し人に移したと思われる。ペストが軍隊を滅ぼすほど猛威をふるう例は、1665年、ロンドンではやった腺ペストの記録に見られる。

1-17 死の病にかかったヒゼヤ王

そのころヒゼキヤは死の病にかかった。預言者、アモツの子イザヤが訪ねてきて、「主はこう

言われる。『あなたは死ぬことになっていて、命はないのだから、家族に遺言をしなさい』といった。」(列王記下20:1-11)

ヒゼキヤは死の病にかかり、遺言を書くほどになった。ヒゼキヤは神に祈った。神は祈りを聞き、三日目には回復すると預言者イザヤに告げた。イザヤは「干しいちぢく」をとってこさせ、それを患部に当てた。するとヒゼキヤは癒された。

1-18 ウジヤ王の病 重い皮膚病

「ウジヤ王は死ぬ日までその重い皮膚病に悩まされ、重い皮膚病のために隔離された家に住んだ。主の神殿に近づくことを禁じられたからである。」(歴代志下26:21)

「重い皮膚病」と訳されたこの病気はながいあいだ「らい病」として語られてきた。

「ウジヤ王の額に生じた皮膚病は、アザリヤおよびすべての祭司たちがみて、ハンセン病と診断したのだから、ハンセン病にまぎらわしい他の皮膚病ではなく真正のハンセン病であったと思われる。」(注9)。かれは一生離れ殿に隔離され、ハンセン病人として死んだので、王たちの墓でなく、王たちの墓に連なる墓に葬られた。

アラム軍の隊長であるナアマンの病気も「らい病」として語られてきた。(列王記下5:1～27) 彼は奴隷として連れてきたイスラエルの娘から、預言者エリシャに会えば治してくれると聞いてでかけていく。エリシャはナアマンに言った。ヨルダン川で七たび身を洗いなさい。そうすれば肉は元に返って清くなる。しかしナアマンは怒って立ち去るのであった。ところが、彼の家臣はあの預言者は「身を洗え、そうすれば清くなるといっただけではありませんか」と諫めるので、ヨルダン川で身を七度洗うと、彼のからだはもとにもどり、清くなった。エプシュタインは聖書のらい病には、別の皮膚病もはいついて、乾癬、疥癬、湿疹、また梅毒なども含んでいたのではないかという。ナアマンが七度身を清めたヨルダン川の水は、硫黄を含んでいるので皮膚病の治療に使われたことを考えると、ナアマンの皮膚病は疥癬であったとも言われる。

ヨブは「頭のとっぺんから足の裏までひどい皮膚病」にかかったとあり、「らい病」といわれたことがある。ヨブは、陶器の破片でからだを掻き、灰のなかに座った。灰はアルカリ性で炭素も含まれているので、痛みとかゆみを和らげるには効果があった。天然痘であれば40日で皮も脱落し、特有な痕跡が残るが、治癒する。彼が美食に慣れて糖尿病にかかっていたらいろいろな合併症を起こすだろう。彼の苦痛はうじ虫の発生によっていっそうひどくなる。全身の発疹は化膿して有痛性腫瘍となった可能性もある。病状の生々しい描写をみると医学的には現実の人物をモデルにしたものではないと考えられる。レビ記13章に「皮膚病」についての規定が次のようにある。

1-19 皮膚病の規定

「主はモーセとアロンに仰せになった。もし、皮膚に湿疹、斑点、疱疹が生じて、皮膚病の疑いがある場合、その人を祭司アロンのところか彼の家系の祭司の一人のところ連れて行く。祭司はその人の皮膚の患部を調べる。患部の毛が白くなっており、症状が皮下組織に深く及んでい

るならば、それは重い皮膚病である。祭司は、調べた後その人に「あなたは汚れている」と言い渡す。しかし、皮膚の疱疹が白くて症状が皮下組織に深く及んではおらず、患部の毛もなくなっていなければ、祭司は患者を一週間隔離する。7日目に祭司が調べて、患部が以前のままで、広がっていなければ、もう一週間隔離する。7日目に再び調べ、症状が治まっていて、広がっていなければ、祭司はその人に「あなたは清い」と言い渡す。それは発疹にすぎない。その人は衣服を水洗いし、清くなる。」

皮膚病の種類はさまざまで、慢性の皮膚病、ただれた皮膚病、炎症をもつ皮膚病、白癬がある。祭司はこれをみて診断をする。7日の後に再度見るとある。

病気が治っている場合、祭司は清めの儀式を行う。生きている清い鳥2羽、杉の枝、緋糸、ヒソプなどを用いて清めの儀式をおこなう。衣服を水洗いし、からだの毛を全部そって身を洗うと、清くなる。この後彼は日常生活に復帰するが、7日間は家の内にいて、外に出てはならない。7日目にからだの毛を全部、すなわち、頭髮、ひげ、まゆ毛、その他の毛もすべてそる。そして衣服を水洗いし、身を洗う。こうして彼は清くなる。じつに細かな規定が定められている。

1-19 恋煩い

「ぶどうのお菓子でわたしをやさない りんごで力づけてください。わたしは恋に病んでいますから」。(雅歌2:5)

情熱的な恋にこがれて、疲れた時、干しぶどうとりんごは、強壮剤となった。

2. 薬剤

2-1 香油

外傷は「傷口からうみをしばらく出し」バルサム香油を塗り、包帯をする。(イザヤ書1:6、エレミヤ書8:22)

皮膚病の診断は祭司が下す。その場合治療は問題とされない。その人が共同体の祭儀に参加できるかどうかを問題にする。もし隔離しなければならない状態であれば、7日、または14日間続け、さらにいつまでも続く場合があった。(レビ記13,14章)

2-2 乳香 balm 創世記37:25,43:11、エレミヤ8:22,46:11、エゼキエル27:17他

アフリカ東部に産する数種の乳香樹の分泌物を乾燥した香料。薫香にまぜ神殿儀式にもちいた。新鮮な乳香は快い香りを放つ淡黄色の液体で、これを凝固したものが乳香である。

ベンゾールを含有し、よい匂いと防腐性をもっている。化粧用ともなる。イエスの埋葬に使われたように死体の防腐剤に用いられた。「ギレアデに乳香があるではないか」。これはエレミヤの預言に出てくる有名な言葉である。(8:22) ギレアデに行けば乳香があるように、神様の元に行けば、癒しがあり、救いがあるではないかと信仰をうながしている。乳香は、薬として用いられた。これはウルシ科の乳香樹で、幹や枝に傷をつけて樹液をとり、梨ぐらいのおおきさの固まりにし

て市場に出す。西南アジアの子ども達はこれをチューインガムのように噛む。

2-3 没薬 myrrh

ミルラの木はかんらん科の灌木で、枝にとげがあり、葉は三枚の小葉からなる。花は小型である。樹幹から出る黄色の乳液を乾かし、これをミルラと呼び、下剤、健胃剤などに用いる。パレスチナ人には高価な輸入品であった。聖油の一要素（出エジプト記30:23）、薫香（エステル2:12）、香料（詩編45:8他）。キリスト誕生を祝った東の博士たちがささげた。（マタイ2:11）

ローマの兵士たちは十字架のイエスに、「没薬を混ぜたぶどう酒」を飲ませようとした。（マルコ19:39）また、ニコデモはイエスの埋葬のために没薬を携えてきた。（ヨハネ19:39）

2-4 こいなすび love apple（創世記30：14）

雅歌7章4節に「恋なすは香り、そのみごとな実が戸口に並んでいます」とあり、つよい香りがする。また、創世記には「小麦の刈り入れのころ、ルベンは野原で恋なすびを見つけ、母レアのところへ持って来た。」（30:14）とある。母レアはこの恋なすびで、ヤコブとの間に五番目の子を生んだ。恋なすはパレスチナ南部のいたるところで見られる。茎は短く、葉は濃緑色で、幅が広く、葉は濃紫である。果実は小さいトマトくらいになる。強い麻醉性の香りをはなち、味は甘く、今も薬用植物として珍重されている。朝鮮人参のように人の股に似た根がエロティックな感じを与えるところから、人は媚薬と信じ、受胎能力増進の効果があるといってきた。

3. 医者と衛生

医者

祭司は病気の診断を下したが、医者ではなかった。「医者」は旧約に4カ所、新約には7カ所でてくる。消極的な意味で「丈夫な人に医者はいらない」とか、「医者よ自分自身を治せ」とでてくる。人を病にするのは神であり、また病を癒すのも神であるとするならば、神が医者である。神は、モーセの手を「らい病にかかり、雪のように白くした」、もう一度懷に入れてもどすと、元の肌になっていた。（出エジプト記4:6）。サウル王の精神錯乱は神が送った悪霊による。「神からの悪霊が激しくサウルに降り」、彼は「ものに取りつかれた状態に陥った」（サムエル記上18:10）

神が医者であると、次の句は告げている。「もしあなたが、あなたの神、主の声に必ず聞き従い、彼の目にかなう正しいことを行い、彼の命令に耳を傾け、すべての掟を守るならば、わたしが出エジプト人に下した病をあなたには下さない。わたしはあなたをいやす主である。」（出エジプト記15:26）したがって、病気の癒しは、神の怒りを和らげることにあり、それは罪の告白、嘆願の祈り、神に対する従順によって、実現することが多かった。神との関係が回復すると病は癒された。

その結果、赦しとそのしるしとなる癒しに対する、感謝と讃美が捧げられた。

イザヤは次のように言っている。

そこに住む者のうちには、「わたしは病気だ」と言う者はない。そこに住む民はその罪がゆるされるからだ。(33:24)

衛生

イスラエルの民がエジプトの奴隷として過ごした期間は紀元前430年、出エジプトの年は紀元前1275年といわれる。エジプトでこんなに長い間奴隷の虐待を生き抜いただけでなく、民は増え続け、女も助産婦が行く前に産んでしまう強さを持つようになっていた。「奴隷の状況がイスラエル人の健康を害することはなかった」と、エプシュタインはその衛生状態が良好であったことを指摘している。さらに、60万人が40年も荒野を放浪し、天幕生活を続け得たことは、厳しい衛生に関する規定がなければできなかった。(注10) その衛生規定はほとんどレビ記に尽くされている。レビ記における衛生規定は11章に食物規定があり、食べてよい動物と食べてならない動物を区分している。12章には出産についての規定があり、出血を汚れたものとし、出産した場合出血の汚れが清まるまで66日の間家にとどまる。子どもを出産したら子羊または山鳩、あるいは家ばとを献げて贖罪の儀式を行って清められる。

皮膚病についてはレビ記13章にある。湿疹、斑点、疱疹、白癬などが生じている場合、祭司に診断をしてもらう。皮膚の患部の毛が白く、症状が皮下組織に深く及んでいるならば、それは重い皮膚病である。祭司は「あなたは汚れている」と言い渡す。また重い皮膚病と慢性皮膚病とを診断する。重い皮膚病と診断されると患者は「衣服を裂き、髪をほどき。口ひげを覆い、「わたしは汚れたものです、汚れたものです」と叫ばなければならない。…その人はひとりで宿営の外に住まなければならない」また、14章の「清めの儀式」によると重い皮膚病が治り、清いと診断された人は「清めの儀式」を行って社会復帰をしていた。さらに「家屋に生じるかび」についての規定が追加されている。このようにレビ記は公衆衛生に対する規定である。公衆衛生に対する合理的な施策と理解するのが妥当である。特に伝染病に対する予防意識の高さが見られる。今のように宗教と政治とが分離していない時、祭司は公衆衛生の指導と管理を重要な任務とし、イスラエルを、神に選ばれた民として、清い聖なる民を実現することに寄与していた。公衆衛生についての知識と意識をしっかりもっていなければ、40年に及んだ荒野での集団生活は維持できなかったであろう。その規定を、神の名において定め、モーセの十戒に次ぐ地位を与えて聖書の一書に加えている。

レビ記17章から26章は「神聖法典」とよばれる。「血」についての定めがある。「血を食べるものがあるならば、わたしは血を食べるものにわたしの顔を向けて、民の中から必ず彼を断つ。生き物の命は血の中にあるからである。」(10,11)

この一句は「ものみの塔」の会員である「エホバの証人」が引用する。輸血は生で血を食べる戒めに触れると解釈する。そして輸血を拒み、死に至るという事件が繰り返されて社会的批判を浴びたことで有名になった一句である。確かに、熱を加えない生血の中にウィルスがいて、これを摂取すると、よくない場合がある。しかし、生の血が弱ったからだに活力を与える場合もある。すでに述べたように、レビ記は荒野を40年も放浪した経験から生まれた公衆衛生の知恵であり、

それに神の名による権威を与えたものであるとするならば、それは地域により、民族の文化により、バリエーションをもったものと考えるのが妥当ではないだろうか。グレゴリー・ペンスはエホバの信者が輸血を拒むことから起こる医療事故をとりあげ「宗教的な価値観」から死の危機に瀕した子どもに治療を義務化する法令を紹介している。それによると、第一に、信教の自由の範囲は、自分の子どもを生命の危機にさらしてまで自分の宗教信条をおしつけられるほど大きいものではない。第二に、これらの子ども達が、のちに成人して異なる宗教的信条をもつようになるかもしれない。(注11)

4. まとめ

神の教えを破ると人は神の怒りあるいは罰である病を負う。人は悔い改めて神に立ち返り、信仰を取り戻すと、病は癒される。旧約の病と癒しはこのように図式化されることを、本稿では基礎的に明らかにした。このような理解が単純で幼稚であるという批判をすることはたやすい。しかし、それですべて葬り去るのも単純すぎる。ここに半分の道理がある。残りの半分は神に対する人の信仰、また責任といって割り切ることのできない問題が残されている。(注12) 旧約においても知恵文学で問われ、論じられている。コヘレトの言葉、箴言、そしてヨブ記はユダヤ教の正統とされる理解に疑義を述べている。ヨブの物語は法・道德・因果を根底から問い、批判している。これらの批判的立場は次稿のテーマとなるが、本稿では旧約の病と癒しの理解を述べるにとどめられる。

補注

1. 課題としての「治癒奇跡」

治癒奇跡は通常二通りの記述がなされる。イエスの治癒奇跡について言えば、マタイ、マルコ、ルカの三福音書は奇跡を客観的に記述している。すなわち、1. 病気の苦痛と困窮、2. イエスとの出会い、3. 治癒に対する感謝と賛美。これをありのまま記している。三つの福音書はどこまでも客観的といえる。それに対してヨハネ福音書は、その「意味」に集中している。盲人の癒しの記事で、この人が生まれつき盲人なのは親が罪をおかしたためではない。本人でもない。「神のみわざがあらわれるため」と、病の意味を記す。また、その奇跡の中に人は何を見るか、神のみわざを見る「信仰」が話の中心となる(8:3)。あるいは、神の権威を受け入れるか否か、「信仰」が問われる(5:19-30)。ヨハネは奇跡を、これを見る人、また聞く人の信仰問題として、主観的にとらえている。このように二通りの記述がなされてきた。

最近、イエスの「憐れみ」が強調されるようになり、治癒奇跡の源として「共感力」が説明される。例えば、荒井献「憐れみー女と男の視点からー」福音と世界1999.8を参考にしていきたい。

本論稿は、奇跡理解の客観的立場、主観的立場を排他的にではなく、相互に補うものとしてとらえ、「憐れみ」のもつ内的構造を、後述する絶対矛盾的自己同一の立場から明らかにすることを目指している。以下に、私の問題意識の変遷をすこし述べさせていただく。

2. ブルームハルトにおける癒し

筆者は井上良雄著「神の国の証人 ブルームハルト父子」に触発されて、1986年の夏、ブルームハルトが働いたメットリンゲンの教会を訪ねた。またその後、居を移したバート・ボル・クア・ハウスで、自分のおじいさんも頭に手を置いてブルームハルト牧師に祈ってもらったことがあるというシュベスターのエリカ・ヴィッテンベルグ女史に案内されて、ひと時をすごした。あの治癒奇跡はなんであった。それは私の牧会上の問いでもあった。

メットリンゲンの村で起こった、ブルームハルト牧師の祈りによる治癒奇跡は、からだの病気だけでなく、こころの病を癒した。またアルコール中毒のような性癖をも癒して改善したという。後には火傷、眼病、肺結核なども癒されたという。

それは、憑依現象をとまなう精神的な病気に苦しみつづけていた、ゴットリービン・デイトゥスの癒しから始まったのであるが、メットリンゲンの村の、当時の雰囲気や少しでも感じられるあの小さな教会のなかで、デイトゥスの肖像画を見ると、その表情には心の傷跡、トラウマと思われるものが見てとれて、その時の苦悩の傷は簡単に消え去ったのではなく、最後まで傷を負って、癒されつづけて生きたのだと了解した。

(以下は井上良雄著「神の国の証人 ブルームハルト父子」を参考にした。またJohann Christoph Bumhardt・Der Kämpf in Möttlingenの1と2を参考にした)

ブルームハルトが牧師として赴任した1838年、33才であった。その時、ゴットリービン・デイトゥスは23歳であった。彼女は幼い頃から不思議な事を経験していた。また肝臓病その他の病気

に苦しんでいた。不思議な経験とは、奇妙な力が働いて、不思議なものが見えたり聞こえたりした。食事の時、発作で倒れたり、叩くような、また引きずるような物音が聞こえてくる。たびたび憑依状態に陥った。それは実際にそばにいる人にはぞっとするような状態であった。そういうことが3年間続いていた。このような状態に、憤怒にかられたブルームハルトは、意識を失った状態にあったゴットリービン・デイトゥスに向かって大声で叫んだ。「手を合わせて、主イエスよ、助けてくださいと、祈りなさい。私たちは、ずい分長い間、悪魔の仕業をみてきた。今度はイエスがなさることを見よう」。するとそれからまもなく、彼女は覚醒し、祈りの言葉を繰り返し、痙攣はやんだ。このようなことが繰り返された。

1843年のクリスマスの時期のある日の真夜中頃、デイトゥスだけでなく兄のゲオルクも姉のカタリーナも苦しんでいた絶望のなかで、カタリーナの口から「イエスは勝利者だ」とほえるような叫びがあった。それから彼らの苦しみは次第に終息していった。

ゴットリービン・デイトゥスの癒しの奇跡を端緒として、癒しと信仰の覚醒はしばらく続き、周辺の教会にさまざまな波紋が及び、反発と批判を招くようになった。ヴュルテンベルク州の宗務局は報告書の提出を求めた。このことがあって、翌年、ブルームハルトの報告書は100部印刷されて、さまざまな形で流布した。ベルンの精神科の医者ド・ヴァレンティ博士は医者立場からゴットリービン・デイトゥスは複合的なヒステリーであり、極度の恍惚状態をとまなう意図的な欺瞞があるとし、ブルームハルトの宗教的傲慢と誤った奇跡信仰を指摘した。

テュービンゲン大学付属病院神経科長ヴァルター・シュルテは「福音主義神学」誌上での論争で「多くの意見交換を損なってきた、神学者と医学者の過った対立から出発するのではなく、双方の関心を結びつける観点から、すなわちキリスト者医師の観点から出発したい」とし、次のように考えを述べている。

(1) ゴットリービンは、精神病ではない。癲癇でもなく、器質的な病気でもない。精神病理的に理解すれば、それは神経症的・ヒステリー症的な障害である。そのような認定は、恐らく多くの神学者を、失望させるだろう。

(2) しかし、ゴットリービンの出来事は、精神病理学的に理解できる個人的な病気を超えている。深層心理学的経験を援用しても、われわれの医学的理解には示されないような領域が、ここには姿を現している。そのような認定は、恐らく多くの医学者を失望させるだろう。

(3) しかし、当時はそのように見なされなかったが、今日では特にヒステリー症と見なされざるを得ない、そのような障害の克服によって、「イエスは勝利者」だという証を貫徹することを、神はよしとなしたもうた。

(4) その場合に、信仰者たちが、ゴットリービンの病状に驚いて、憑依について語り、そのような状態の克服が、彼らに奇蹟という印象を与えたとしても、それに対して、精神医学的立場から、反対することはできない。それは別の平面上のことである。

(5) 病気と憑依状態 医学的治療と奇蹟は、絶対に相互排除的なものではない。それらは、場合によっては、同じ出来事の二つの可能な観点である。

(6) この事件の多くの点は解きたい謎に包まれているが、この出来事が、当時それに驚愕した人々によって、まったく純粹に奇蹟として体験され、彼らを新しい確信で満たしたということに、固着するのが重要である。

報告に対するこのような批判や理解がなされた。

しかし、ここで起こっている治癒奇蹟の中心は「イエスは勝利者」というデイトゥスの姉カタリーナの口から出た告白にある。それはその場に居合わせた妹デイトゥスの告白でもあり、ブルームハルトの告白ともなった。それから「勝利者イエス」の目を通してすべてを見ていくことと結びついた治癒と信仰覚醒が続く。それは人間の努力や信仰の結果というものではなく、「思いがけなく上から与えられたもの」であり、ブルームハルトはこのような受けとめ方を「客観性」と呼ぶ。「この客観性ということが、彼の牧会の最大の特徴である」。(井上良雄「神の国の証人ブルームハルト父子」105頁)。この場合の客観性とは、当時のドイツ経験主義の流れからおこった様々な信仰覚醒運動、また啓蒙主義的な樂觀主義、主知主義、とは区別される。「思いがけなく上から与えられた」客観的なものであった。人間を上から啓示される神の赦しの光の中に見るというのが、彼の牧会の基本的態度となった。後で教義学者となったカール・バルトの立場に大きな影響を与えた。

このように見てくると、ブルームハルトとカール・バルトとの対極にあるといわれるブルトマンとは、あるところまでは殆ど変わらない共通一致点を見るのである。

3. 「奇蹟問題について」 ルドルフ・ブルトマン

ブルトマンは「奇蹟問題について」次のように言っている。

奇跡 (Wunder) は 1. 奇跡は自然現象や、人間の意志や、働きから起こる出来事とは区別された神の行いである。この場合、奇跡はまちがった全能思想から、すべてを神の行いとすることによって、その実、神の行いと世界の出来事との区別を捨ててしまうという過ちに陥りやすい。

2. 奇跡は、規則どおりに経過する自然の秩序に反する自然の出来事である。奇跡を自然の法則の破れとする理解は、神を超自然的な出来事の原因者とし、神は異象 (ミラクル) を行う者になってしまう。このように二つの考えが語られてきた。

1と2の両者は、排他的に一つが正しいというのではなく、その実、相互に緊密に結びついた一つの奇跡思想を構成する。「奇蹟問題について」(zur Frage des Wunders) はブルトマンの生前には未公開の論文であるが、彼の神学論文集一に収められている。

これは、ブルームハルトの報告に対する、調査委員会の評価と殆ど同じであって、繰り返して要約すると、(1) ゴットリーベン・デイトゥスの症状を、神学者を失望させるだろう、神経症のヒステリー症的な障害と診断する、(2) そのような病気を超えて、医学者を失望させるであろう「神の行い」が認められるとする評価と、(5) にあるように、病気と憑依状態、また医学的治療と奇蹟は、互いに排除するものではなく、場合によっては、同じ出来事の二つの側面である。

このような評価は、ブルトマンと共通している。そこから、ブルトマンが違うのは、奇跡が神の行為であることを見抜くのは、客観的にではなく、信仰をもって、自分をその被造物として神

に向かい合うとき、奇跡の中に隠れています神を見る。そうするのは信仰的決断がなすという、主観的な立場である。神が語りかける相手とされている自分自身を抜きにしては、治癒奇跡を論じる事はできない。奇跡の中に隠れています神を見るかどうか。信じるかどうか。そこで、信仰を通して見るものは、これまで世界に見てきたすべてと矛盾し逆転したものを見ることになる。これがブルトマンの奇跡理解である。ブルトマンはいう。

神は、私たちに、法・掟 (Gesetz) としてあらわれる。また、自然は、規則的な秩序 (Regel) として働き、歴史は因果律 (Kausalität) によって進行する。これを私たちは日常としているが、治癒奇跡における、その破れや逆転に、人は驚く。人はその信仰において、また不信仰において、神を見るか見ないかということになる。神は私たちに法・掟 (Gesetz) としてあらわれる。神はその正しい法・掟で結ばれる契約の相手として、私に現れる。また自然はその秩序・法則 (Regel) によってある。これを理解し、その力を利用して、自然科学は発達してきた。また、私は歴史の中で、病にあったり、事故に遭う。また思い通りにいかないような事になると、その因果を疑い、因果を考慮する。

このような西欧の論理において、前提となっているのは「法」「法則」「因果律」である。原本14頁、日本語訳17頁のこの論文の中にGesetzmäßig (合法的な) という言葉が29回でてくる。Regelmäßig (秩序にそったとか規則正しい) は3回でてくる。そしてKausalität (因果律) が7回でてくる。奇跡を論じる時、神と人の間に「法」(Gesetz)、自然界に「法則」(Regel)、また、歴史の中に「因果律」(Kausalität) がある。それは、私の前にあり、あるいは上にあり、向うから私に向かって、私の行動を裁いたり、私の思いをはかったりするものとしてくる。

私たちはこのような西欧の論理に対して、それを模倣する仕方では、受容できないことがはっきりしている。東洋の論理を離れた時、私の中に法・掟 (Gesetz) が立ちただけで、神との間に深い溝をみて、絶望するばかりである。西欧の論理に対して、東洋の絶対矛盾的自己同一の論理は、絶対なるものが、私を離れず私の内にあり、絶対に一つになりえない矛盾したものでありながら、自己同一なのである。そこで、神は私を少しでも離れているのではなく、どこまでも密接不可分離に自己同一である。その極限に生命の発端があり、生命の終わりがある。

4. 絶対矛盾的自己同一

滝沢克巳は、この論理に自他の混同から生じる過ちを見て、神共にいます人、すなわち「インマヌエル」(マタイ1:23) の原関係に、神と人との逆にできない「不可逆」という三文字を入れることで、神秘主義における、神と人との区別を失う自己同一化の過ちを防ぎ、絶対矛盾的自己同一の論理を完成した。また、「不可逆」の三文字を知らないことから、滝沢に対する神秘主義等々の誤解がさまざまに流布している。絶対矛盾的自己同一の論理によると、法・法則・因果律の意味は次のように変わる。

そこで、人は神に対して、否、神に規定されている、「被規定性」を生きる。法や掟を、われわれは、神に規定されている私の被規定性を表す言葉として理解する。そこで法や掟は、私の行為から離れて、その行為を裁くものではない。そうではなく、神と私の絶対矛盾的自己同一の関

係の中で、裁き、そして同時に赦す。

また人は自然に対して、その秩序に規定されている被規定性を生きる。しかし、私たちは、その秩序を侵害し、オゾン層を傷つけ、環境を破壊し、自然界の逆襲に苦しんでいる。また、私から離れたところから裁かれているように思われるのであるが、その実、自然の法も絶対矛盾的自己同一的に私の中にある自然との関係性をあらわしている。人は歴史の中で因果律を離れることはできない。私は因果律に絶対矛盾的自己同一的に規定されている被規定性を生きている。過去から現在へ、現在から永遠へと移る因果律が私を離れて向こうからやってくるように思われるのであるが、人はこの因果律とは密接不可分の関係を生きる。

吉本隆明によれば、「関係の絶対性」とは、神の絶対性ではなく、神と私の関係そのものが絶対であると言う。吉本にとって神はないので、人と人との関係が絶対となり、また人と社会との関係そのものが絶対的なものとなって人を規定するということになる。マチウ書試論は吉本のマタイ福音書解釈であるが、イエスとユダヤ教との関係がイエスにとって絶対的となり、イエスの弟子集団に対する関係そのものが絶対的となる。そのような関係の絶対性を論じる。しかし、絶対とは、創造者なる神と被造物である人との、逆にできない不可逆の関係であり、ほかと比較する相対的なものを絶することを意味している。筆者の吉本隆明についての問いに滝沢は「まだまだ」と言ったが、その意味は、人は人であり神ではない相対的存在である。神は絶対者でありながら、人とは矛盾的に、不可逆的に自己同一である。この「不可逆」のもつ厳しさとやさしさにおいて、神は他と比較することのできない淵をへだてている厳しさがあり、優しさとは、その全く比較できない、造り主と造られた者、全能者と塵にすぎないもの、永遠なるものと死に行くものが、無条件に、矛盾したまま、自己同一であるという。おおいなる赦しの自己同一としてあらわれる。その大いなるやさしさをいう。

このように絶対矛盾的自己同一なるものとの接触に、私たちは癒しの現れを見る。それゆえに、私たちは絶対矛盾的自己同一を希求するのである。絶対矛盾的自己同一は、神が人と共にいます「インマヌエル」の真相である。このような事がどうして判るのか。「インマヌエル」とよばれたイエスを解き明かす事によって可能である。私たちは、イエスに現れた「憐れみ」のなかに絶対矛盾的自己同一を見ようとするものである。

注

(注1) 滝沢克巳(1909-1984) 人生の意味、存在の根源への問いに促されて哲学を志し、西田哲学における根源的問題を論文「一般概念と個物」として発表し、西田幾多郎に初めて理解者を得たと賞賛された。絶対と個の原関係(絶対矛盾の自己同一)を問う西田哲学から、これを神と人間の根源的関係(インマヌエル)としてとらえ、いわゆる滝沢哲学(神学)の基礎とする。(「日本キリスト教歴史大辞典 寺園喜基参照」尚、「絶対矛盾的自己同一」については西田幾太郎全集第九巻、哲学論文集・第三の三章を参照。

(注2) 出エジプト記9:10、列王記下5:14、歴代誌下26:19

(注3) イエスはお答えになった。「本人が罪を犯したからでも、両親が罪を犯したからでもない。神の業がこの人に現れるためである」。(ヨハネ9:3)

(注4) マタイ9:27、マルコ9:23、10:51、ヨハネ11:25,26

(注5) マタイ9:36,15:28,20:34、マルコ1:41,2:5,3:5、9:22,10:4、ルカ7:9,7:13,8:6,9:41,17:13,18:38、ヨハネ11:5

(注6) 旧約聖書に49箇所、出エジプト記4:6、レビ記13章に21回、14章に9回、22:4民数記5:2,12:10、申命記24:8、サムエル記下3:29、列王記下5章に5回、7:3,8:15,5歴代誌下26章に4回

(注7) 新約聖書に13箇所、マタイ8:2,3,10:8,11:5,26:6、マルコ1:40,1:42、ルカ4:27,5:12,22,17:12

(注8) 創世記6:4

(注9) 「新聖書辞典」菱川、病気と薬剤の項

(注10) W・エプシュタイン、『旧約聖書の医学』76頁以下

(注11) G. ペンス『医療倫理』324頁

(注12) 「新聖書辞典」菱川、病気と薬剤の項

参考文献

滝沢克巳『滝沢克巳著作集』第一巻、西田哲学の根本問題、法蔵館、1972年

西田幾太郎『西田幾太郎全集』第八巻、世界の自己同一と連続、行為的直観の立場、岩波書店、1979年

井上良雄『神の国の証人ブルームハルト父子』新教出版社、1982

Johann Christoph Bumhardt・Der Kampf in Möttlingen,Gesammelt Werke 2,Vandenhoeck & Ruprecht in Göttingen,1979

ブルトマン『奇跡問題によせて』ブルトマン著作集一、新教出版社1986

Rudolf Bultmann,Zur Frage des Wunders,Glauben und Verstehen,1993

吉本隆明『信の構造』全キリスト教論集成、春秋社、1988

W・エプシュタイン、『新約聖書とタルムード』時空出版、1990

W・エプシュタイン、『旧約聖書の医学』時空出版、1990

E. ヴォルフ『旧約聖書の人間論』日本キリスト教団、1983

犀川一夫『聖書のらい』新教出版社、1994

犀川一夫『ハンセン病医療ひとすじ』岩波書店、1996

G. ペンス『医療倫理』1、みすず書房、2000

辞典

Theological Dictionary of the New testament, Vol3, G.Kittel M.B.Erdmanns Publishing company

新聖書大辞典、キリスト新聞社、1994

キリスト教大事典、教文館、1963

日本キリスト教歴史大辞典、教文館、1988

今日の治療指針、日野原重明、安部正和、監修、医学書院 1990